

日本アートマネジメント学会関西部会例会（2022年度第3回）  
（講演会）

## 《奇跡の森》～ 人類の進歩と調和をめざし 70年万博が森になる～

### ◆講演者

畑 祥雄(写真家&映像プロデューサー,一般社団法人 大阪国際メディア図書館 館長,写真表現大学&Eスクール 講座ディレクター)

### ◆内容

畑 祥雄氏は、写真家として1985年に『西風のコロンブスたち 若き美術家たちの肖像』を発表し、プロデューサーとして1990年の「花博写真美術館」に企画立案から関り、成安造形大学、関西学院大学、IMI インターメディアウム研究所等において教鞭をとられてきました。現在、畑氏は《奇跡の森》と題し、70年万博跡地にある人工森林を被写体とし写真作品に取り組まれています。写真家やプロデューサーとして、また教育者として関西の文化に携わってきたご経験を踏まえ、また写真作品《奇跡の森》の紹介を通して、アートマネジメントの可能性についてお話しいたします。



畑祥雄 2021 《奇跡の森4》

### ◆司会進行

中西美穂（アートマネジメント学会関西部会）

（日時）2023年2月26日（日曜日） 午前9時50～午前11時30分 （受付午前9時35分より）

（会場）西宮市フレンテホール（JR西宮駅：南出口から徒歩1分）

（参加費）会員無料、非会員1000円

（定員）25名（要事前申し込み・先着順）

※対面で行います。状況により開催方法を変更する場合があります。

◆お申し込み：以下のフォームよりお願いします。

<https://forms.gle/vm9GYiSVhEE51Phw7>

◆お問い合わせ：日本アートマネジメント学会関西部会 jamkansai@gmail.com



↑申し込みフォームQRコード

主催：日本アートマネジメント学会 関西部会

西宮市フレンテホール（指定管理者：日本管財・文化律灘・HA2B 共同事業体）

共催：西宮市

協力：大阪国際メディア図書館、The Third Gallery Aya

## 【講演概要】

### 《奇跡の森》

～ 人類の進歩と調和をめざし 70 年万博が森になる～

「万博の森」は「日本庭園」「太陽の塔」「民族学博物館」「日本民芸館」を次世代への贈り物として守り続けてきた。生物多様性を育む「密生林」、四季を愛でる「疎生林」、市民が憩う「散開林」と設計された多様な森創りに造園学が初めて挑戦し《奇跡の森》を創り上げた。

70 年万博の跡地は交通の要所から「都市センター」が構想されていたが、環境破壊・大気汚染・急激な都市化への批判に押され「緑に包まれた文化公園」へと政策が急展開した。その背景には日本民族学の元祖と言われる経済人の渋沢敬三から始まり、芸術家でパリ大学民族学科卒の岡本太郎、文化人類学の泉靖一東大教授、梅棹忠夫京大教授、SF 作家の小松左京、造園家の吉村元男へとつながる先駆者たちの共鳴関係が重なり奇跡を生み出した。

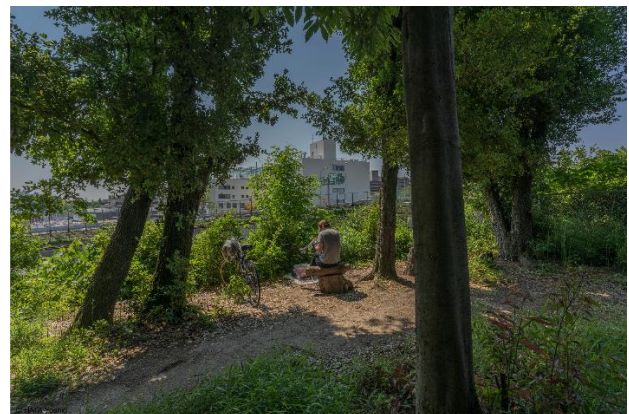
そもそも「太陽の塔」は「人類の進歩と調和」を理解するテーマ展示館であったが、原始時代の土偶的な姿と四つの意志を示す顔を持ち、塔内には単細胞のアメーバーから人間まで 292 体の生物がつらなる系統樹「生命の樹」が展示されている。その奇抜さにテーマ解説の役割が当時は霞んでしまった感がある。しかし現在は、次世代への贈り物として存在する「太陽の塔」「日本庭園」「日本民芸館」「民族学博物館」「万博の森」はすべてが「民族学」と「多様性」をキーワードにすると明確につながる。

当初は 30 年で人工的に森を創るなど不可能と思われたが、地球温暖化への危機感や生物多様性を希求する時代の声に応える道しるべとして「奇跡の森」はその存在意義が高まりつつある。テーマのひとつ「調和」は「多様性」と表裏一体であり、民族学から異文化理解を深めることができ、人工的に生物多様性を創る「万博の森」は、未来に向けて地球市民の生き方を感得する場所でもある。

畑 祥雄



《奇跡の森 1》



《奇跡の森 3》

写真解説：人工の森だが 50 年経てば生物多様性が都市圏で体感できる「万博の森」へと進歩と調和が進行する。